件名：【教育の視点】韓国で見た「英語教育の光と影」：23 年の先行体験から学ぶ、日本の子どもたちに必要な「English Affection」と読解の階段

キッズブラウン・パートナー教室 オーナー様、先生方各位

いつも大変お世話になっております。KidsBrown Japan 編集部です。

皆さまは、韓国と日本における「小学校英語の正式教科化」の時期に、実に 23 年ものタイムラグ（韓国：1997 年導入／日本：2020 年全面実施）があることをご存知でしょうか。

およそ四半世紀近く早く公教育に英語を導入し、国を挙げて過熱する民間教育市場を経験してきた韓国の歩みは、いま激動の過渡期にある日本の英語教育界にとって、まさに「少し先の未来を映し出す貴重な実験場」であり、私たちが学ぶべき成功と失敗の示唆に満ちています。

先日、私自身が韓国へ渡り、現地の英語教育現場を視察してまいりました。教室見学や保護者・指導者の方々との対話を重ねる中で見えてきた「早期英語教育の光と影」、そして私たち民間教室が日本の子供たちに手渡すべき「本当の知性の土台」についてお届けいたします。

1.「早すぎる背伸び」の代償：韓国の過熱と、日本の段差

20 年以上の先行アドバンテージを持つ「英語教育大国」の韓国ですが、現地で目にしたのは小学校低学年の児童に対して TOEFL 対策や高度なエッセイライティングを課すなど、非常に強烈な先取り学習の現実でした。

大人の目線で見れば一見「圧倒的な実績」に映るかもしれません。しかし現地の先生方から漏れ聞こえてきたのは、「過度な要求を急ぎすぎた結果、幼い段階で子供たちが英語に疲れ果て、飽きてしまっている」という深刻な疲弊の声でした。本来は知的な好奇心と共に出会うべき英語が、単なる「苦しいノルマ」へと変質してしまっているのです。

一方で、目を日本の公教育に向けると、真逆の構造的課題が存在します。 小学校 3・4 年生の「外国語活動」では歌やゲーム主体の緩やかな体験にとどまる一方、5・6 年生の「教科化」で急激に教科書・読み書き・成績評価が導入されます。この「急激すぎる段差」に足を取られ、基礎を固める前に脱落してしまう子供たちが後を絶ちません。

- **韓国**:「早すぎて、高すぎる(過度な背伸び)」
- **日本**:「緩やかすぎて、急に難化する(断絶とギャップ)」

方向性は正反対ですが、どちらも「子供の発達段階に即した“自然な学習の階段”が設計されていない」という本質的な欠陥を抱えています。

2. 保護者の「不安」と「English Affection(英語への愛着)」の欠如

もう一つ、韓国の現場で非常に痛烈に感じたのは、民間教育が保護者の焦燥感を煽る構造の危うさでした。「周りから遅れてはならない」という不安から頻繁なレベルテストが繰り返され、点数に一喜一憂する日々。現地では、過度なプレッシャーが子供の情緒に影を落とし、かえって発話を閉ざしてしまうケースすら危惧されていました。

23 年先行する韓国の歩みが証明しているのは、**「短期的な点数と引き換えに、子供の心が英語から離れてしまっては本末転倒である」という冷徹な教訓です。 だからこそ、これからの日本の教室運営において最も重視すべきは、「English Affection(英語への愛着)」のケア**にほかなりません。

英語を単なる机上の「テスト勉強」にするのではなく、「他者とつながり、世界を広げる道具」として子供自身の心に定着させること。

- ゲーミフィケーションを通じた「自発的な達成感」の獲得
- 間違いを恐れず、安心して発声できる「心理的安全性」の確保
- 何より、物語の世界に入り込みながら英語を使う「ストーリーテリング」

「話しなさい」と強制されるのではなく、「自然と話したくなる環境」を整えることこそが、AI 時代にも揺るがない真の学習意欲を生み出す決定的な差別化要素となります。

3. 結論:KidsBrown が敷く「フォニックス → ストーリー(直読直解)」の美しい階段

韓国の 23 年間の試行錯誤と日本の断差を目の当たりにしたからこそ、KidsBrown のカリキュラムが持つ教育的価値の高さが際立ちます。

私たちは、子供の発達段階を無視した過度な背伸びをさせません。 まずはフォニックスによる「音と文字の結びつき」を確実に確立し、小学校の教科化や中学校のテキストに出会った際にも「自分で読める!」という絶対的な安心感を与えます。

そして、その土台の上に「圧倒的なストーリーの量」**を投入します。 大画面のタッチスクリーンを通じ、主語＋動詞という英語本来の語順のまま、情景（文脈）としてダイレクトに読み解く訓練を重ねる。この**「直読直解のインフラ」があるからこそ、子供たちは無理なく、自立した読解力へと成長していけるのです。

目指すべき具体的なマイルストーンは明快です。**「学校の英語の授業が始まったとき、誰よりも自信を持って手を挙げられる“発表王”に育てること」**。

この成功体験と誇りこそが、その後の長い学びの道のりを支える最強のエンジンとなります。

■ 編集部からのメッセージ

英語教育において最も恐るべきは、テストの点数が一時的に伸び悩むことではなく、「子供の心が英語を拒絶してしまうこと」です。

23 年先を行く韓国が見失いかけている「子供目線の情緒的アプローチ」と、日本の公教育が埋められない「体系的な読解への接続」。この 2 つを完璧なバランスで両立させているのが、先生方が日々実践されている KidsBrown の教室現場です。

子供たちの「好き」という熱量（English Affection）を守りながら、英語の語順のまま自立して読み解く本物の知性を届けていく。その誇りと確信を胸に、今週も目の前の子供たちへ最高のレッスンを届けてまいりましょう。先生方の熱意あふれる歩みを、今週も心より応援しております。

KidsBrown Japan 編集部 公式サイト: https://kidsbrown.jp

💡 **オーナー様へのアドバイス（保護者面談・スクール便りでの活用法）：** 秋の面談や保護者会では、ぜひこの「23 年先行する韓国の事例と日本の段差」を比較してお話ししてみてください。「日本より 23 年も早く小学校英語を導入した韓国では、幼児期からの過度な先取りやテスト至上主義によって英語嫌いになる子供が社会問題化しています。一方で日本の学校教育は、5 年生から急に難しくなりギャップに苦しむ構造です。KidsBrown では、フォニックスと大好きなストーリーを通じて『自分で読める自信』を育てるため、小学校の授業で堂々と手を挙げられる発表王になります。この自己肯定感と直読直解力こそが、中学以降の長文読解や英検を自走できる最大の土台です」とお伝えいただくことで、お教室の指導方針への深い共感と長期的な信頼を獲得していただけます。